

101
合
144

087704-000-6

101-144

恩

橋本 素行/編

M33

DBF-0012

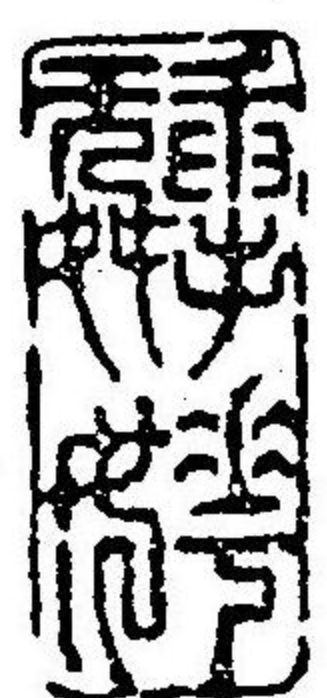


101
2
144

恩

乾

壽且康
滄浪園主人



小の字は現るゝ茶の字は
所はしるゝりて

あまのりて

無名抄りて

坐守心書行して

茶の字のほかに
あまのりて

茶の字のほかに

あまのりて

あまのりて

あまのりて

あまのりて

あまのりて

あまのりて

あまのりて

焚香禮佛
P...
...
...

...
...

序

人誰不知恩。唯在...
必報。況乎他事。此仙老人...
曰僕之有今日。出于香以秀...
梳之恩者多。銘心不遺。...
七句如七人。世謂素弄。...
人日來追錄。三大人以...
舊友亦從焉。蓋欲不打其人...
恩也。僕不文。敢結香前。...
三

柏道有父恩之撰。澤水泊子有歸園。屋上
梅亭有祖父恩。俱是俳諧集。以謂也。常
筆後如老出聲。何意百味飲。報恩
如德恒沙。年身之。如貫文辭。其性可味。
但不可不少加鹽梅也。今將西遊。語之石背
道人。三句兩送。料理方成。天下多事。誰似
微生之醜。聊示不食之也。刊成爲奇一。

明治三庚午天長節

白念坊文電



梅餘香以居士

明治三庚午年九月十日致行年四十九歲
東都駒込行町願行寺に葬る

香以大人幸姓ハ細木通稱ハ藤次郎。又東次郎と改む。幼名子之助と
呼ぶ。屋號を津の國屋と云。故に世は津藤と呼ぶ。香以ハ俳名ありそ
他種之の別稱あり。狂歌俳諧を能く。又戲文も巧あり。此人一生の
事業ハ其頃世上を今紀文と云ひし。そのも知る可し。後の話ハ
幾る事談ハ亦多くあり。

代々山城河岸に住み。家業表面は外酒屋なれども。其実ハ大名へ全
の用を達し。廣く諸家へ出入せり。天保の末ハ弘化の初年。丸の内よ
り出火有りて居宅類焼く。此時より酒屋の見世藏を止めたり。夫よ
り五六十年を過ぎ。御親父不幸の事有り。此御親父ハ俳名儂寓。深川

通よて仲町の遊びをせられたり。毎は汐留の山崎。本挽町の吉川か
どいふ船宿も遊び。此處へ時々深川より。羽織衆と唱ふる女藝者や。
軒間などとも来り遊ぶ事もありしと。又本挽町を始め。葺屋町堀町の
芝居も毎々見物なり。至盛の遊びを盡されたり。狂言亭為永春水
が作の梅屋と云奉に。千葉の藤兵衛と云通密い。此御人の事なり。
香以大人も。御親父に劣らぬ大通ふて。吉原をもとより。品川新宿か
ど日々遊び。又猿若町三芝居をも後々見物あり。當今の九代目市川
団十郎が。未ど河原崎権十郎の時と。ひのきよと。之が若く狂言他
者河竹新七後ハ然
阿弥と相談ありて。新狂言を作らせたり。又其頃の名
人市川小團次も。ひのきよにされ。種々の新狂言を書きおろさせたる
事もあり。就中権十郎ハ大ひるまなれば。衣服持物より。何とれとあ

く興へられたる品々の裏に黠しと事あり。此外角力落語漢釋師
から。歌舞音曲の諸藝人に至るまで。あの大人の恩顧を蒙らない者
はなひ。山城河岸が御宅で何々から。河岸は且郡まゝ。河岸さんとは
かぞへ。通用して居ました。


爰に一ツの話あり。御一新の前々年次。香以大人。通塞して下総寒川
に寓居せらる。或日近邊の人々多く集りて。今日を江戸より角力取
の差船まれば。皆々出迎ひ来るとは。舞臺あれば。香以大人御子息
御同付ひて。夕刻より演述が教歩に出られけるに。間もなく着船あ
りて。角力大勢上陸を。其中に雲龍小野川を外幕の内二股目の角力
十餘人。香以大人を見て大に驚き。俄に下駄をぬぎ。砂地よあををつ
き。時侯をのべて挨拶したりと。寒川の若共ハ肝を潰して。大人

の威光に驚きたり。さて翌日近隣の者香以大人方へ来りて云へる。さきもくあはく様いあらゆ所方うか。昨夕角力の挨拶振りを見て。一同魂げました。田舎でい関取なぞい。御地頭様の様に存して居ます此小を関取が不殘子をついて。去下座をまゐる。何んたる事と。まに付ても旦那の御威光い大そうお者だと。皆と噂せし居り外と云へば。香以大人笑々ナニ彼等い江戸で私ーが遊よ出る時い。いつでも供をさせました。あの通りでござり外と云された。又云をきたい。おまへさんい江戸へ炭薪の荷を送ると聞きました。何方へ送りなきやうのと。ナニ小づづ船の次でふ送り外が。淺草途へ系る。堀田原の紺屋へ。おもに送り外と云。大人曰く。それい私ガ家へ出入の吳服屋の親敷でござり外。今度紺屋へ所出の時。私


の事を聞ては後なさい。江戸で私を知らぬ人の淺草の親善様を知らぬ。同ト事をござり外と。いとねたりと。我等が縁者から此話を聞きました。昔の紀文も此様お者で有たらうと。うまい末の世へ話おは殘しおくものなり。まづ〜面ふき話の中と集へよと。うまいにやまな。

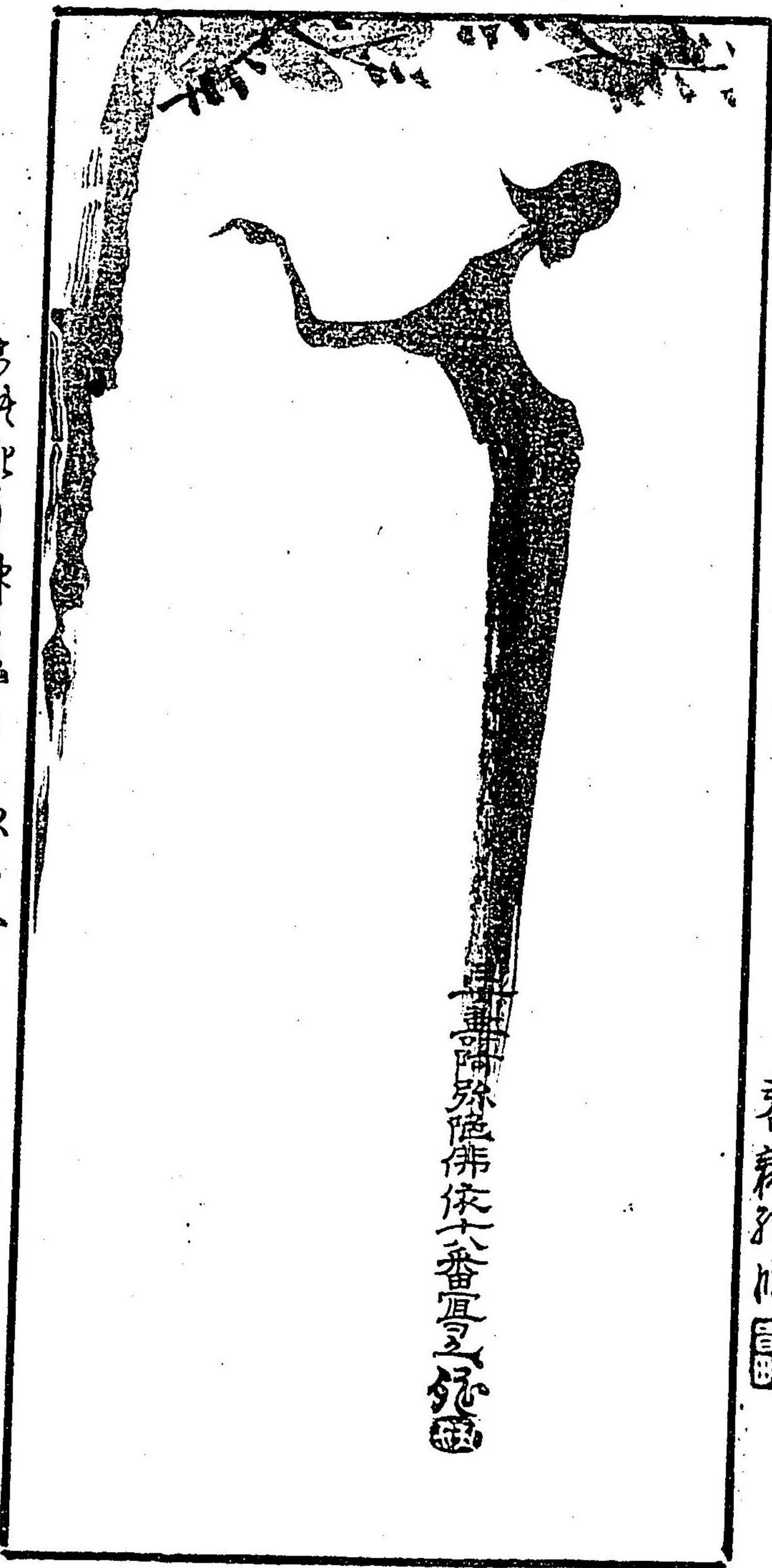
香以大人の諸儀へ出入の禮札を與へられ〜目ふをえなれ〜我等を養ふ〜
 香以大人の諸儀へ出入の禮札を與へられ〜目ふをえなれ〜我等を養ふ〜
 香以大人の諸儀へ出入の禮札を與へられ〜目ふをえなれ〜我等を養ふ〜

表

おまへさん
 香以大人


裏

禮
 香以




香以子と東京山城河岸の豪家なり世々以津藤為通稱

香以子と東京山城河岸の豪家なり世々以津藤為通稱
性潤達り一物も不揚名を重んず財を輕んず俠客の
風も似たり非諧の音子骨龍を傳へ文才洒落よく
人の及ぶおみあらず月花を遊ふを年ありて陶朱猗頓の
富とていふもやうなく終に財東も肌膚やいふまじれん更
者の教とせざりしと事庚子の仲秋病かへ終に臨めり時
あさか原や一ちのつちをさる垣隣

香以子と東京山城河岸の豪家なり世々以津藤為通稱
性潤達り一物も不揚名を重んず財を輕んず俠客の
風も似たり非諧の音子骨龍を傳へ文才洒落よく
人の及ぶおみあらず月花を遊ふを年ありて陶朱猗頓の
富とていふもやうなく終に財東も肌膚やいふまじれん更
者の教とせざりしと事庚子の仲秋病かへ終に臨めり時
あさか原や一ちのつちをさる垣隣

と属は書かきかひりつ其像減をせり嗚呼人生す
天上の快樂を擅り命ぬる日は至こと知られたるわらうつを
捨つるまひとく愛屋と妄想愛惜の念なく大抵後唐の
有様を尊く奉しめりなれ野夫は隨喜のあまのりや
執着をなしある白のかけ流し

南無阿弥陀佛 回向一付
阿心坊是仏

何の何ぞし

年梅も後、櫻の香も

西の粒をじ見る香も

あつたよりのあつた

あつたよりのあつた

あつたよりのあつた

あつたよりのあつた

花とあつたあつた

あつたよりのあつた

あつたよりのあつた

花の香もあつた

あつたよりのあつた

あつたよりのあつた

あつたよりのあつた

あつたよりのあつた

あつたよりのあつた

あつたよりのあつた

春もあつたあつた

夏の部

あけくつ 徳川家康の墓
夏に植はるる菜也

あけくつ 徳川家康の墓

。

あけくつ 徳川家康の墓

あけくつ 徳川家康の墓

あけくつ 徳川家康の墓

あけくつ 徳川家康の墓

あけくつ 徳川家康の墓

あけくつ 徳川家康の墓

あけくつ 徳川家康の墓

あけくつ 徳川家康の墓

あけくつ 徳川家康の墓

あけくつ 徳川家康の墓

あけくつ 徳川家康の墓

新吉原玉座三十三丁ハルル人オモクニ
カシキ所ハオモクニオモクニ
経舟一舟オモクニオモクニ

カシキ所ハオモクニオモクニ

カシキ所

カシキ所ハオモクニオモクニ

カシキ所ハオモクニオモクニ

カシキ所ハオモクニオモクニ

カシキ所ハオモクニオモクニ

カシキ所ハオモクニオモクニ

カシキ所ハオモクニオモクニ

カシキ所ハオモクニオモクニ

カシキ所ハオモクニオモクニ

カシキ所ハオモクニオモクニ

カシキ所ハオモクニオモクニ

カシキ所

カシキ所ハオモクニオモクニ

カシキ所

カシキ所ハオモクニオモクニ

別格物雨降りる雪の川

縁切の縁とともさるうらた

顔の雪も三日の月影

るるの雪も風よの物事の

下原の雪

暮初の日よあはれ海を渡る

根付の雪も何ぞはたす
三國の雪も何ぞはたす

雪のふりも果てぬるやと梅

朝の雪も雨もせうの葉大根
魚けの雪も走らぬ雪のうら
鴨も雪のふりも多田川

京都の雪も三乳の雪も礼佛の雪
雪のふりも時雨の雪も川を渡る

雪のふりも雪のふりも雪のふりも
雪のふりも雪のふりも雪のふりも

雪のふりも雪のふりも雪のふりも

雪のふりも雪のふりも

雪のふりも雪のふりも雪のふりも

狂言一節

三三の佛ノコトヲシテモスル

心入の菩薩シテ

三十四の佛ノ會ヲモテ

佛ノコトヲモテ

佛ノコトヲモテ

佛ノコトヲモテ

佛ノコトヲモテ

佛ノコトヲモテ

佛ノコトヲモテ

佛ノコトヲモテ

佛ノコトヲモテ

女中福のせうり

佛ノコトヲモテ

佛ノコトヲモテ

佛ノコトヲモテ

佛ノコトヲモテ

佛ノコトヲモテ

佛ノコトヲモテ

佛ノコトヲモテ

佛ノコトヲモテ

佛ノコトヲモテ

佛ノコトヲモテ

佛ノコトヲモテ

佛ノコトヲモテ

此の世の事やうに一はるる世に
とらるる

室のくわいせいの世に世に世に

とらるる世に世に世に

南無と母の世に世に世に

多しと頭と世に世に世に

好まると世に世に世に

何事の事やうに世に世に世に

かたことと世に世に世に

たんとおまると世に世に世に

ふさうと

世に世に世に世に世に

世に世に世に世に世に

是佛院實相日解居士

明治七甲戌年四月二十六日致行年五十九歳
東郡谷中北豊島郡谷中村四十七番地
妙経寺に葬る

是佛大人本姓ハ齋藤通稱を権右衛門と云。質淑世よて諸家へ金の
用達をまゐる。又江戸町に在る鬘結麻の株を多く所持し。世は谷中
の大三河屋と云。俳名英南。薙鬘しとて是佛と稱す。佛學を好み。茶道ハ
千家表流を學び。書画共に能くま。一生の間。種々面白き活あり。今其
一二を記し。

或年成田の不動様へ糸指の折り。早朝御堂へ拜禮しとされ。下向の
時に。石段の側より一人の小坊主が。折子小大鼓を持ち。折こまをよ上
げ。芝居の真似をまゐる事ありて。まゐるまゐるをさかしきを見て。旅亭の
主人に。彼者ハ何者なるやと尋ねければ。亭主の答に。彼ハ此在の百

姓の悴よて。當年二十餘りと存ト候。小兒同様至て愚なる性候よて
日々菅御地内を遊びあるま。何方よて承り候や。おれハ大岩馬十と
云役者なりと申付と。是佛大人之を聞て面白き者かな。どうぞ彼者
を此處へ呼で下されといハ。直に右の馬十を座敷へ連れ来る。其
日ハ雨降り出しければ。一日はきハの愁み者とま。大人の位一人ハ
猿若町茶屋武田屋の亭主虎右衛門ナリ。此者ハ以前役者よて。大岩
馬平と云ハ。後に七代目市川白猿の弟子と成り。市川馬平と云。今
一人ハ。吉原の幫間田子七平と云者ナリ。大人ハ馬平をいやがらせ
ふ。此男自ら馬十といハ。おまハ此師匠の再来あらべ。能く心を
付て丁寧に扱へと云付られ。馬平大よよとりたるもをハ。此馬十
が芝居の真似。小兒よりもをハ。一日奥に入りたり。然るよ彼が

大鼓けふ此雨天故。濕りて音が悪る。とて。夫を氣にして度々火
にかざして何ぶる。是佛之預見て武田屋に向ひ。師匠の大鼓を何ぶ
ま。とていませ。馬平難儀がる。七平とつて強き火本あふると。怒
ち草が破まころ。おれハといふ中。馬十大考を何げて。イヤダハ
と泣き出。旅亭の主人を始め。皆こいろ。とてなごめませ。と聞
いれず。是佛大人心付かれ。金考分を七平に申付け。遣まされたり。ハ。
イヤダハと泣く斗りあり。旅亭の主人之を見て。それハ餘り澤山
まぎて恐入る。鳥目よて宜しう御座り外と云。馬平天保殘を五六枚
出して遣ると。馬十大喜びよて。是でハ大鼓がいくつも買へると云
たりと。是佛大人その心を感。面白き奴。人の此心持が大事な
りと。大笑いせらま。由。帰宅の上よて勸なり。

軒も傾き棟もたわみ家もゆるぐん金もあつたれはさるる一ちの
一ちのあつたれはさるる一ちのあつたれはさるる一ちのあつたれはさるる
あつたれはさるる一ちのあつたれはさるる一ちのあつたれはさるる
たるは須達長者の祇陀園にありける黄金もあつたれはさるる一ちの
森の梢もあつたれはさるる一ちのあつたれはさるる一ちのあつたれはさるる
さはさるる一ちのあつたれはさるる一ちのあつたれはさるる一ちのあつたれはさるる
おのゝ家も黄金ありて困はさるる一ちのあつたれはさるる一ちのあつたれはさるる
吾もさるる一ちのあつたれはさるる一ちのあつたれはさるる一ちのあつたれはさるる
奴婢もあつたれはさるる一ちのあつたれはさるる一ちのあつたれはさるる一ちのあつたれはさるる
のみ打ひそみ若て何せんやとあつたれはさるる一ちのあつたれはさるる一ちのあつたれはさるる
まはさるる一ちのあつたれはさるる一ちのあつたれはさるる一ちのあつたれはさるる
してさるる一ちのあつたれはさるる一ちのあつたれはさるる一ちのあつたれはさるる

世に命をたれんやと覺悟しつゝあつたれはさるる一ちのあつたれはさるる一ちのあつたれはさるる
さめて華厳の初空の曹司の責もあつたれはさるる一ちのあつたれはさるる一ちのあつたれはさるる
律の軒の塵もあつたれはさるる一ちのあつたれはさるる一ちのあつたれはさるる一ちのあつたれはさるる

えのや—盧山の主人のあつたれはさるる

元治元年二月十五日剃髮

阿心庵是佛—時年五十一才

戒師 大慈院師
選名師 明王院師

よく見れとおの景も臆

髪よ〜汝も元来有想を著して多寡好悪を論せし
今も根本を截断して葛藤を放下せしむ

若何か〜なれ枯りらるは仏

此程久しお眉其節を是傳靈之申入の供物取捨不傳字を
あか〜申れ申〜永圖に平来の希切を相果〜大満足は
是佛もあ捨ゆ〜一二条も扱き貴賢見入ゆ〜過日申出の
さして散らまてを極のニ菩提より剃髪の句の力興業者と様平
存ゆ〜よう〜

子三月廿

竺仙南堂

又

辻君の神親ありか〜

ちく仙

菩提院皆譽是阿彌即入居士

明治十丁丑年十月廿二日發行
五十六歳東都淺草三谷町
廣徳寺に葬る

片岡庄六家孫を大黒屋と云。新吉原角町よ〜仲の所通りあり。廊内
の男女藝者の取締を業とす。俗よ吉原の見番と云。此家ハ天明年間
田沼侯御志中仕時。取立に相成候由。當時の主人は俳名を秀民と云。
三吸房とす。即房等の孫あり。茶道ハ雲州流よ〜。書ハ抱一上人の風
を學び。遊藝ハ河東節を語る。業體に似合まぬ好事家よ〜。衣食住と
も世の人好よ超えたり。世間の惡口悪口に清え岡十郎と仇名せり。其子
細ハ容貌の八代目岡十郎の傍に似たりと。其形かたちの清え延壽太夫
後後に右兵右兵衛に似たりと。因りて。云ふらせしや。又能狂言を好む。装束
を着けて催しを仕たりと云。公儀より御咎を蒙りたる事あり。

是佛大人より馬十の事を聞き面白がりて共馬十連と云連中を
取立る。其頃八代目園十郎ハ親海老蔵が天保中御咎を蒙りし時よ
り其赦免にあらんこと代祈りの為め毎年正月五九月ハ成田山へ
参詣して水行をまゐる事ありし。或時かの馬十を見て面白き事に
思ひ歸りて後武田屋の亭主に此事を話せし。夫ハ先年かくくの
事ありしを谷中の且郡より仲の町に且郡が関かれ其者を見たい
とて。此頃呼びよ遣る積りで待せり終と云に。三升それハ妙だと大
喜せしが。其後馬十を吉原へ迎へ。帮間柔の宅に置く事となり。衣類
かど仕立て與へけし。馬十ハ大仕合せの身とかりたり。馬十時々
調子も合ふぬ三味線を引く事あり。是佛衆民両大人大ふ喜まれ。早
速新規に三味線を捲へさせ。象牙の撥まで添へて與へられたり。其

三味線箱へハ。八代目園十郎書付を仕たり。後程過ぎて馬十成田へ
折歸りければ。土地の若肝を漬して。ロクく三味線ひけもせぬ若に。
苗稼から立派な品を下さると。大そりな事かなと。驚き云ふやせ
しが。是より馬十に三味線を教へ。新内の明鴉茶蝶などを語る様よ
仕たりとぞ。大人達こそを関うれ。折角のいゝ馬十を。さんぐに
て仕舞たり。あまの仙人の盤を刺した様もはとて大笑く。

螺舎秀民者。四世大黒屋庄六。本姓片岡氏。江戸芳原人。生於文政五年。好酒及佳刀。以任俠自負。又好讀書。兼善俳諧點茶。而茶儀則傳不昧宗納法。俳句則奉晉子體格。入其角堂門。後龍晉子別號螺舎。家素富。風流瀟灑。所藏古器物。皆希珍也。云。以明治丁丑十二月二十一日。享年五十六。歿。葬于山谷廣德寺。三世螺舎孝節。茲建小碑。以表欽慕之意。

右は向島百花園にある碑の文なり。數年お大槻先生園内の碑を
集めて園の「あけ」と題せる小冊あり。其中より採つたは附刻す
其意を秀民大人の名を動きなき石文より表さる様末よりし
いよ〜永く世子傳へんことをはかるとなり

稱譽吟阿彌常念信士

明治十四年己年七月十日歿行年六十六歳
芝増上寺地中天光院に葬る

雅名を田たトと云。あれを住居田所町の故あり。トの字は真字よかけ
とも。片假名よよむなり。本名は和田平右衛門。和田平といへば天下
に響く鰻屋なり。

角力好きよ。中々幅がき。本場所では行司溜で見物する人あり。
然る小文久の頃より。芝居好きよ成り。芝居とも替目よよは。吃
度見物す。馬十連の人々を慕ひ。みづうら真外の馬十と名のる。

明治元年の六月。五十三歳よ。薙髪し。吟阿弥と云。知る人を八百禪
寺に招き。羅漢供の饗應あり。摺物を配る。雜俳を好み。俳諧を吟造と
云。ま〜藤紫仙と云。

田原元及平らり。羅漢令
る是れをうまの仲間

の二年に書

心算の門に入し者及
達三升抄の

口をわくの親子のわ

龍象草

梅子の書

中ら形安ふの梅の男

於八古書

生血を心付のさくらぬ節入

の心書

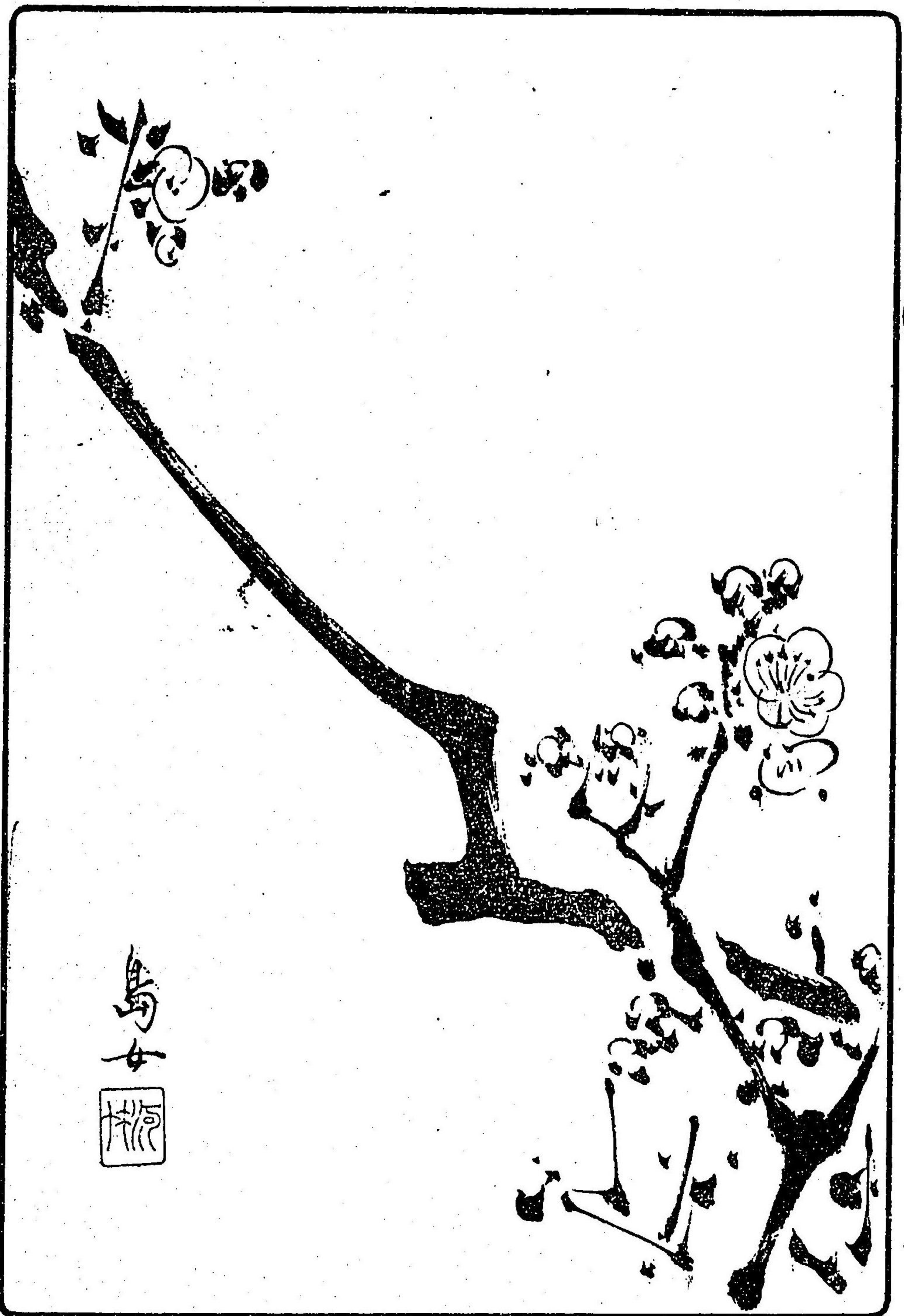
のの後何者形相の相

釋黙阿彌居士 明治二十六年一月二十二日歿年七十八歳寺ハ
淺草北清島町東門跡添地の源通寺

本姓吉村。歌舞妓狂言作者。初めは斯波晋輔。後に二代目河竹新七。俳
號其水なり。老年は古河黙阿彌と云。その名は高きは世の知る所な
れば終て略す。

私化嘉永の頃より。明治年間筆納め迄の新狂言の数は二百種有り
と云。何れもしく面白き仕組よて。セリ。フの巧み世に勝れ。近世狂言
作者の親玉と云べし。志うして其生貨の律義あるは。是又芝居
道の移人なり。

おのれと翁とを舊友のよしみ何れど。別て我を愛しとれ。我が深物
の營業を何れとなく引まられ。明治十四年六月狂言貳番目の名



馬十ヶ條

馬十連花之條

一苗赤中者才一家内むつ
 へ常積登し平常
 口舌の事ありしはあはれ
 女房を始下めは信ありて安

聊をすゝみあはれに耳へん
其法中のまじりたる心哉可
為多用事——

一 喧嘩口論や自理窟長法候
於て形葉テ多量に一切無用也
一 大觀より火吞むる道一断り形

一 家有る者得るハ女房罷妾
に對し少く櫻りやしいんぎん
と名相争ふ事毎に以事——
一 食物と云ふは右に鯉は川魚
鬻むる何れも珍味と云ふも
忽余の抱眼を抬頭を以

とし園のいしし恰の餓鬼の
天のいししいししいしし
く食ひし間浦のあつた
し首陽の炭佐野の棠飯
等々席を多しとてはたは
の外是のいししいしし
のいししいししいしし

おとししいししいしし
調のいししいしし
ししししししし

一於席と投尻相信の中場を
いししいししいしし
五音毎にすしし遺すの場を

去る心志を好顔をニヤアくと
波の外より輿出さしむるおのそ
は後押キムおのそ入ニヤと勿論
念々の河ハ替時お慎踵キキ
後門キム置キムけ形キキを
中一河城キム

一 巾長短大の形子の

善悪格キムのキム高下キム
天然く得キム頭キムの形キムを見
下キム一キムの事キム

一 集會く第不急ハ勿論刻
限キムの事キムの形キムを

其時之流之金印持事可有之
五斗之量之粟公事月換其場
より追返し申人自共苦く用
金海云十分物云々兩大觀
二分五副觀一云々 猿鳥を
火の共七人 別々(二十) 中

聊矣乱々々々海云々

但(中)申(中)事(中)は(中)そ(中)あ(中)ま(中)ら(中)し(中)
婦人(中)召(中)事(中)人(中)者(中)云(中)り(中)別(中)々(中)云(中)々(中)
云(中)々(中)云(中)々(中)云(中)々(中)云(中)々(中)云(中)々(中)云(中)々(中)

一尚(中)申(中)之(中)者(中)古(中)矣(中)形(中)の(中)顔(中)色(中)

其(中)其(中)之(中)苦(中)云(中)々(中)云(中)々(中)云(中)々(中)云(中)々(中)

分(中)海(中)也(中)云(中)々(中)磨(中)云(中)々(中)入(中)云(中)々(中)容(中)候(中)

五條のふ見石を垣なくん哉
一平のゆ候中、わすしの交紋うき
言せ眉をいそめ之類もく人を
見解をいふし、家しつうて
形白聲が幾し聊くもを通
くめし、ふか振おとれおたる

くい素平をヒラあふこのはく
一當陣中より居る一切をいふ
至るふあし、しるもあつて賣女の
あひ召仕く、わすれを意路の
ちりおの首く、しり分限も
し早未一統、振おとれあつて

○ 隠一玉塚の及處歎人年莫
去の局料を立二千五百相拒

○ 此の局料を立二千五百相拒

○ 今し高書人罵る有合の衣敷

○ 調及濁人言さる事あり深人丸

○ 上げ見倒ゆる事拂女以て意

○ 婦より人雜費あ結平了

○ 一毎技第合中より致進ふりな

○ 台の中より者多しはく為長

○ 洗金分法より進一二枚の書

但何格じらる事言有る日

ともか意し候ハ用控世

リ事

古之儒者堅相守不寄
何事尾尾はまうふ約束
等皆くく致中かゝる惟
仍く一同志に如件

嘉永五年天初を仲の年日

於津武	團子樓	副坊觀	副尖觀	宿大觀	長大觀	凸大觀
四	增	賢	烏	團	春	真
齊	良	棒	將	棠	乞	婦

水吞官老丈
 同 同 同 同 同
 綾卜 折番 的驢 鷓色 波化 竺仙

信免也美嘉也女人きんきんか
 きんきんか
 中言

孝老婦の時候
 刀刃のり法

羊お湯油のさる下後
 禁お

思病いのみ禁句
 禁お

すきー
 世勢
 場

仲間におまへ〜ち〜おまへ
遊女通ひの若狭けにかた
妻も〜うおまへ〜おまへ
とんちやね〜高きまづら
舞急奏源をけ〜み〜う〜
せん〜い〜ふ〜お〜と〜さ〜
不埒な法も〜御も持あ〜
おま〜の〜確を何ぞ〜

一音房の書次

〜の〜大馬十の房〜
おま〜め〜おま〜

〜の〜大馬十の房〜

〜の〜大馬十の房〜

捉書はある金印は是なり
但シ攝子金印を置きたるなり



大如圖
厚三分半

凸大觀真乞婦

前記是佛大人あり。他名英甫馬十連して凸大觀と云。其子細ハ軟上
に少シ痛あり。夫はとあらむ。餘り賑ましき處かどハハ出るこゝに
嫌ふ故に之を出さむと云ひしにぞ。痛のでくに通ふを幸ひし。凸
大觀と云。真乞婦も其瘤の事なり。

牡丹の四山の狐心經の巻

大目海老お退きするの

梅香しるしおの木の
とる本

世に伝はるるもの

乙女の手紙の巻物

口伝三行の巻物

乙女の手紙の巻物

月影の巻物

乙女の手紙

子母の巻物

乙女の手紙

山屋の巻物

長大観背乞婦

同上片岡秀民大人なり。馬十連にて長大観と云。其得の面體おも若
かりに因てなり。脊乞婦とい脊に瘤ある故あり。是の真乞婦に對し
て脊乞婦と云あり。

卯山観の巻物

名所伝の巻物

乙女の手紙

乙女の手紙

梅香印古

葉のうらみはるゝまのしづ

栄河歌集

いづれもいづれもいづれもいづれも

あはれ

川さきさきさきさきさきさき

いづれも

飯たしつらつらつらつらつら

浄延信士 宿大観團栗

安政元年八月六日歿年三十二歳
大阪の一心寺に葬る

本姓の堀越。八代目市川團十郎の事なり。俳名三升。馬十連よて宿大
観と云事よ付話あり。三升子馬十連へ加入致夜と。兩大観へ申込む
と。亦大観承知して。さらば何大観と仕たり宜からうと云。三升子云
大観と申して。皆々様へ失禮なれども。宿大観よて御勘辨下され
たしと。其澤の私に遊ひまきに。場所柄よ固りて。出来並候へども。
品川新宿千住など。宿宿場へ参り外せば。大幅を致し。天下に人なき
如く遊びを致し外から。斯く名付たく存ド外と云。亦大観始め連中
一同最も承知いたし。皆人も大喜びよて。大観の席に恙く事といな
りたり。

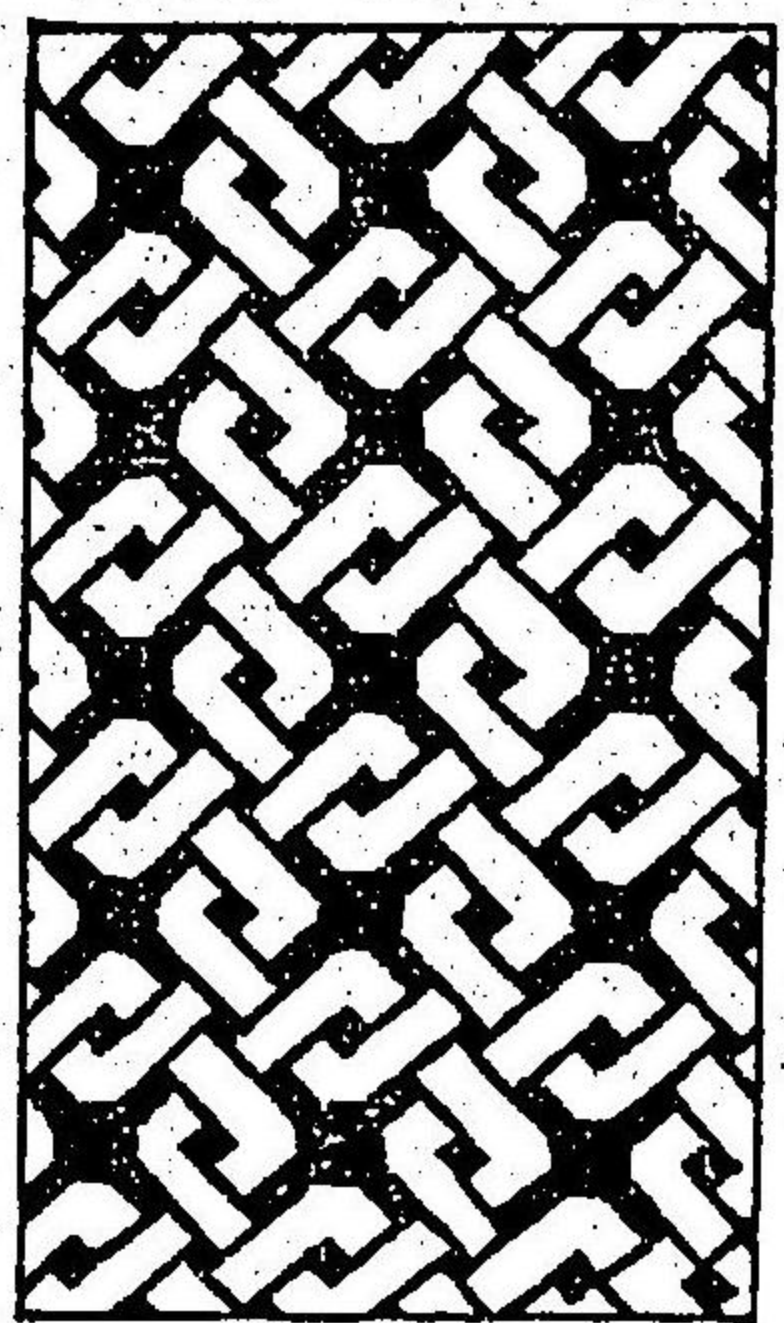
爰に一の話あり。小塚原若松屋と云家に。おでんと云女郎あり。三升子之を相方とて遊ぶ事あり。兩三度行けども。いつも一ねせせぬ故。女郎之を氣にして。三升の男衆にて寅と云ふ若く教へ。何り思召よかなむぬ事があてり知れぬが。どろどろ一晩でも宜しき故と。親方さんにさう申てと云と云。寅を其由を話すと。三升子云。おれは日本市川團十郎だ。小塚原の女郎と寐と云まれちやア。野暮に云へば。家の瑕瑾ど。そんな事な云ふら。まう此家へい來ぬと云ふ。寅この事を女郎に吐きと。おでん大に驚き。まい大變ど。御願ひ申した事いどうでもよい。是迄の通りに御出下さる様に。直籠をりて下さると云。三升子あれを聞て感心なぬと。まてい二枚給でも持へてやろうとて。衣物を送り遣たりと。

此事に付。又一話あり。一日日れは仲の町に長大觀と。兩人にて芝居見物に行く。三升子喜び能く直せ下されと。喜ひ昨日小塚の女が若物を遣と禮よ。望蒲團をよこす。ました。どろどろ教き初をりて下さると云。長大觀云。折角公へ送て來と物だから。号が教初を仕あちやア。婦人が不承知だらうと。言ひ捨て。機教へかへると。さく何とより。寅が望蒲團を拵て來る。故に長大觀この禮に三階へ蕎麥を遣らうと云。日れらもまい好き思付と云て。そば敷二百申付ると。長大觀がイヤ待ちねへ。川柳にほまづいと繩を樂座でたどり込といふから。舞臺へさうらだらうかと云ふ。日れら曰く。何よ。こちらいどとまても。教初へ引つけて仕舞ふら。採ひませぬとて。まよて事済たる事あり。

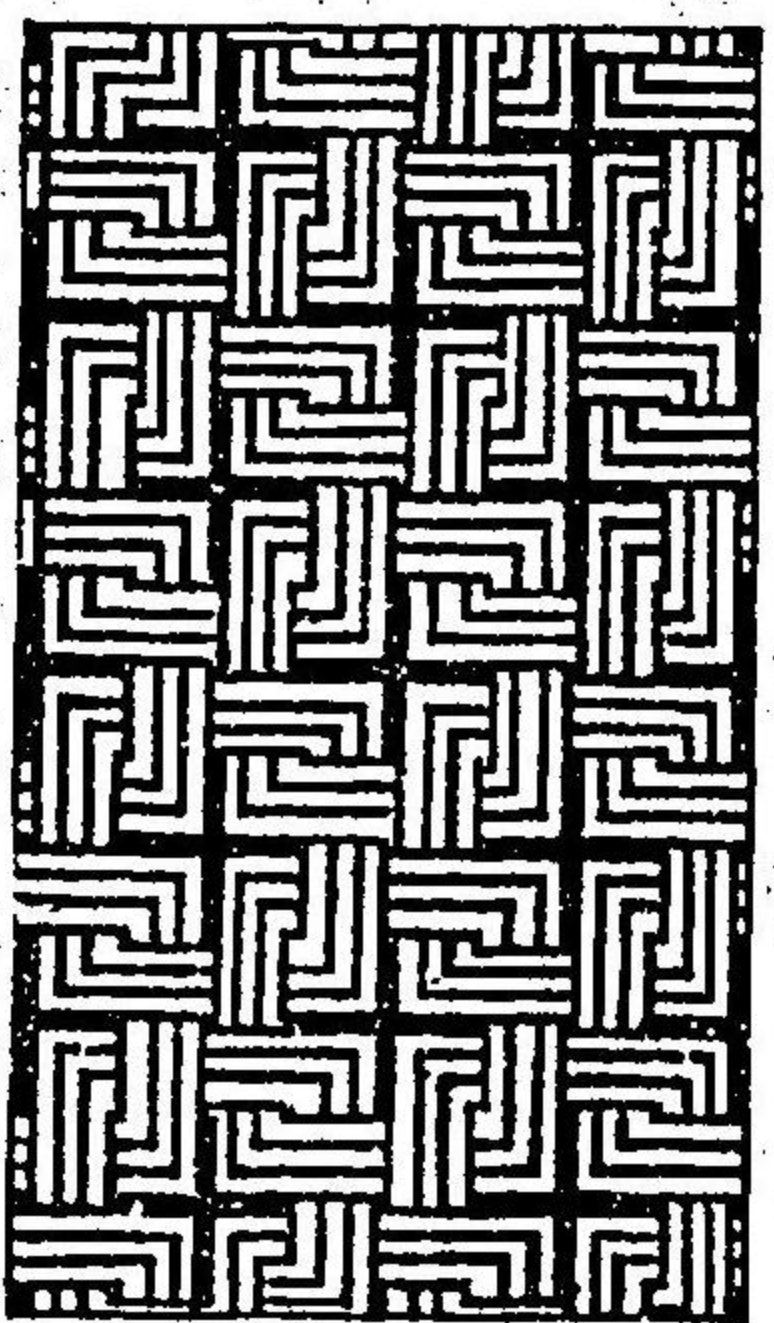
三千連書共扇

ありとよき三つおとし
かみきり

又一話あり。或幫間が大丸廻り若小六孫方格子の浴衣地を一反
持て来て呉ると頼む。翌日持て来ると。その幫間が六孫方格子の浴衣の
替の若小法被見る格ふ物が何ふ成る物り是れ三孫の組合せて有の
ど。ペイあれハ八代目の六孫方格子でおざり孫三。翌日三孫の六孫方
格子の浴衣地を持て来るといふ嘘です。八代目の人氣の是で所察し
あるべし。七代目の好んだ格も人いみんな八代目の思ひ付の格と思
つて居孫。三孫の六孫方格子の浴衣縮緬を八代目織と唱へまゝた



忠厚の打ち
向ふ六孫方
素抱の形



七代目が六孫
右を初め一時
の素抱の形

附言。三孫子の親孝行より。御上より御褒美を戴きたる徳人なり。
されど今日の其事を知らぬ人も多からんと思ひ。御申渡の文を
たよ載せ。尚も其美德を後の世に傳へんと欲するなり。其文の首
に父海老藏御仕置云々と有り。因て具合せのため其御仕置の中
渡書も載せらるゝす。

深川島田町無藏地借

十兵衛方同居同人父

歌舞妓役者

海老藏

寅五十二歳

天保十三年六月廿六日申渡

其方儀。家作の儀を長押塗框等不相成。雖并道具の義の結搦よ
致間教旨。前より所觸も有る。其方家業體之儀を時の風

俗に随ひ。専ら表向を飾り不申にては。是負も薄く。道具類も右
に准じ。金高き品も多し。却て融通も不宜候邊。右所觸を
背き居宅長押造り塗櫃に致し。赤銅斜子と釘隠を打附。尙向え
は御影石燈籠を并大石敷多差並。又も同所土蔵之内へ不動の
像を安置。莊嚴向総金箔彫物あり。須弥壇朱塗彫物。金泥之合天
井に致し。或ハ小單筒へ赤銅斜子に金之丸相之紋を付け。小栢
等にも金物に致し。其外手を込め候金物。唐櫃并に款之款に相
用。奈良細工木彫彩色之雛等。迄之買取。右雛道具も島相にて全
砂子を並き。胡粉紺青にて雛葉菊相五之相之紋形を並き。右
前不知町人より黄受付邊。右雛壇へ控之雛を敷き。庭敷内へ相
飾り。其上狂言小用品之義も。一ト通りよては見物人の氣に

入冨敷と存。草装具三一領。并鍔にて冨敷具三一領。何れも武
用之品を所持致し。狂言と相用。且又先代より持傳へて邊。珊瑚
珠之根付緒へ附候高蔭繪之印籠等。狂言と併相用。又ハ銀並垢
之千口リ等所持致し處。金子に差支。右之内千口リを所持致し。
其貯之品ハ質入。或ハ可賣拂と願ふ。金子借受候後。去ル丑十月
質素儉約之義被仰出候と付。不相濟候義と後悔致し。居宅向造
作事取留候邊所有之品。右所觸に付。不取寄付借上之品。
殊に先年より買置付邊。高廿五丈七尺之石燈籠一對。深川永代
寺境内に於て。開帳有之候不動へ奉納可致と。高價之品右境内
へ差並候殿。不届と付。觸に背付品と并居宅取留候本品共取上
り。江戸十里四方追放申付る。

猿若町一丁目専助地借

歌舞妓役者

弘化二年五月七日申渡

園十郎

已二十一歳

其方義幼年より柔和にて父母之心に背外事なく。藝道を心掛
け。去ル寅年父海老蔵事御仕置に相成。其方若年故。父よりは給
合も相劣り。其上借財多きて難滞之暮方より有る小處。給合等
受取の度毎よ。初穂と辨け除け置。其後海老蔵住居致居候下総
國幡谷村へ相送り。同人大坂表へ致旅行の節も。路用を厚く
手當致し。以後も書状を以て。驚々機嫌を聞き。返書之趣を番細
に母をみよ申聞。安心為致。同年八月同人病氣之初より。水を阿
比成田山不動へ平癒之祈願致し。藥を煎下食事振等を。自身取

扱。看病も行届。其後歌舞妓役者共。一統猿若町へ引移り。其
方義も當時之住居へ移越。弥以舊衣食を心掛け候。付。不勝
手之様子。母の心配を厭ひ。法事後素より致し。故。困窮より無之趣
に申成置。朝夕食物衣類等も。不自由より無之様に心を用ひ。其居
興行中も。狂言之幕合有之候時。宅へ立歸り。母の機嫌を聞き
妹も其身形を助共相應に身分に付致遣し。幼少より孝養を以
たり。養育致し。好みつせも睦教尼を致置。且又父之弟子園兵
衛。七十歳に相成。養ふ者無之候。付引取。病中より死後より
至る迄。厚く世話致遣し。其方事年次より相成候間。妻を近し様
申勧め候者も有之候。得共。自然母之氣不入候節。心遣之趣
に相断り。其上四ヶ年程以前より。毎朝精進茶断り。成田山新

勝寺旅宿と不動へ日参致し。父も身分無事にて帰府を祈り。母
と心を慰め。右辨孝養を盡し。兄弟等も世話も仍届候段。奇特
と義も付。為褒美鳥目十貫文取らせ遣す。

これ後四年嘉永二年の十二月海老苑所赦免あつて江戸に
かへる又五年まご安政元年の八月三外子の父も誘れ大坂
より往き自害

親くはつしと足来りしん

中身を印上より察せたりし

あつてはつし

も

鳥目三

杖のちかふ

天樂院安譽暢音宗阿菴主

安政元甲寅年十一月三日没行年
三十二歳淺草山岩の廣徳寺に葬る

副大觀鳥狩。本名今井安右衛門と云。赤坂今井谷に住して。名主役を
勤む。後辭して新吉原角町へ移り。質屋を營んで大黒屋と云。鳥狩と
いふ名は。鼻の先き尖りし様小見ゆる故に。綽號といひ此人は秀民大
人の異腹の弟。由氣経よて至て面白き人物。能狂言を好む。催しを
して上より御咎を蒙りたる事あり。茶事の雲州流なり。俳諧發句等
の事い。我等存せざ。種々物染もあまど暇也。

りのしんは安しおのん

馬十連春興扇面白不覺

法性院自然日慧信士

明治乙亥年七月二十八日没行年甲八歳
南豊島郡柏木村百拾番地常圓寺葬る

馬十連よて。副坊觀賢^{けんけん}棒^{ぼう}嘉井田氏あり。菓子渡世にて。本郷伊豆倉横
所に住す。松平加賀守様へ御金御用達をまゐる家なり。本家の婿婿相
續し。自身は分家して。炭渡世を始め。同所あふらげ横所に住居す。
其時仕ふ番頭。小三郎といふ者ありしが。寫本の赤穂記でも讀
みし事と見え。義士等が赤穂の舊君を亡君^{はうくん}と云ひしを覺へたり。
主人の事いそ君と云ふことに心得。おのが主人の事を亡君と云
今日の君い御留守など。出入の者や小僧にいひきつせし由。此
事の我等の舅が此店に小僧を勧めたる者より。影にききたりと。高
人の番頭などい。多し。此様なる人あるなり。ま故にこの賢棒君の

倅名を文字を變トク坊業とも略して御坊とも云。
棒君後に質店を廢業して。神寶方御用達とあり。亮左治兵衛と云。馬
十連の質棒の。六の神寶方の唱へを借りて。前の坊業よきかせしふ
り。慶應戊辰變革に際。横濱へ移り。海田と改む。其後南豊鴻郡鳴子町
へ移居し。種々の劇阿れど略す。

馬十連喜無扇面句五覚
空海

馬十連喜無扇面句五覚

釋 桑阿信士

明治十二年己卯八月七日歿行年六十六歳
山の寺大久保極楽辨天專福寺に葬る

高木依平。家稱小倉屋。駒込千駄木町園子坂の上に住す。馬十連にて。
園子樓増良と云。其譯は友人澤名して阿猿かさると云へばあり。お色能く
人の知る所にて。深川鷲昌の頃よりの道樂者あり。系指南傳馬町の
産れしと。幼より世事に才有り。壯年に至り。小倉庄助といふ諸藩御
金御用達の名代を勤め。後に園子坂へ移り質鋪を開く。倅名をひさ
おと云。まゝ桑阿とも。幸姓の遠山よて。待人雲如先生の弟あり。

馬十連喜無扇面句五覚

馬十連喜無扇面句五覚

寶三升

枕竹人三三の果枝

梅香馬車

古きたの流皮衣 花の中

羅漢會

乙女口流し 黒髪青瓜

花のうら

とりあひまのつらみ 運程

毒の髪をあらわし

のりまの若けしのつらみ 白あし

鳥に香

ちるのまゝなほつる(ま)ま

長い髪を 髪をしののけ中を 一期

まのまゝ / まのまゝ 赤髪

辞也 髪をのけしたまひ

赤髪をのけしたまひ

心ゆくまゝの髪をのけ

馬十連春興扇面白不覺

白池院鷺阿彌壽星居士

慶應元乙丑年十月二十音段行年六十一歳
駒込富士前町大運寺に葬る

鷺傳右衛門。後に寛右郎と改む。徳川家御経狂言師あり。馬十連に在り。津武凹齋と云。凹齋とい歌に在るみたる所ある故に名と云。美しき男振りよ。藝道い上手の聞え有り。

中々狂道樂者にて。吉原ふ遊び中万字のおいらんに。鷺の飛びし浴衣を。深めて遠りたるに付き。悪摺あどなき。舟いろく面白き話し何れと略す。

馬十連壽星

鷺に在るや壽星の後の事か

静心院圓山道榮居士

安政五戊午年二月二十三日歿行年六十八歳
淺草清島町常林寺に葬る

淺草材木町に住して。名を後を勸むる勝田権左衛門あり。一中節の
淨瑠璃を好て。そ道よ委しく。隠居して後。都一閑斎といひしが。故あ
りて嘉永二年より宇治紫文齋と改む。新曲數十段を作りて。一派を
弘めたり。

元来歌道を好み。藤原春世と云。まこと狂歌をよみ。千種庵法持と云。馬
十連よて水呑官老夫と云は。おいそれ者と云へる心なりとぞ。和歌
と狂歌と一首づゝ覚えたれば書きつく。

馬十連喜無扇面句不覚

松平家文

おきこのころの世のまゝ
おきこのころの世のまゝ
おきこのころの世のまゝ
おきこのころの世のまゝ

松仙古朴信士

明治十二年卯年八月十二日發行年六十九歳
深川法乘院に葬る修し圃齋堂と云ふ寺

馬十連にて水呑官^{おやめ}後々通稱大津尾忠右衛門と云。初ハ深川古石^{おきい}坊
の遊女屋ありしが。天保度此所趣去りて。新吉原町へ移住し。後俄人
とかり。永機宗匠の門に入り。世中庵古朴と云。此人は悪仙人と仇名
して。種々奇談もあれと略す。後々の名は。目が小く見當違ひあるが
故なり。

古中書古朴

ある

月一平上まのかりとむきの書

遠三井

海老原の御殿に

梅野の御殿

身は又しおのちの御殿に

経巻を

岸もまたおのちの御殿に

の御殿に

おのちの御殿に

馬十連春興扇面向不覺

正覺院法廣信士

文久元年酉年六月十六日歿行年未詳
本所表町奉久寺に葬る

武田左虎右衛門馬十連にて。水呑官折番と云。もと本所町の芝居茶
屋半田屋の養子なり。猿若所へ移りて。武田屋と改む。上にも出でし
大谷馬平よて。後よ七代目の門弟とありて。市川馬平と云。此人能く
密の氣を取ることに衆人は勝れ。話の面白き男よて。當時通り者がる
人とは。この武田屋へ出入らざるを肩身せまうとしたり。其上河原
崎屋の奥役を勤め。廣く世間に名を知られたり。
白石齋の狂言に。観音真山の場よて。キザ通人をして。評判屋一かり
しが。え未殺若い下子なり。折番の名い。いつも中間と町内番人の役
を勤る故に。管人せいやがらせよ折番といふ。

都千中馬十連の御普請

馬十連喜無扇面句ふ覚

釋乘華信士

慶應元乙丑年六月二十一日歿行年五十四歳
築地西幸願寺地中妙覺寺に葬る

都千中馬十連（おとせんちゆうばじゆん）は水呑官的驢（みづのくわんてきうろ）本姓吉田氏なり。信州の産にて。若き
より江戸に来る。日本橋辺の左官棟梁に人柄吉兵衛といふ者あり。
其娘に思つうれ。婿養子とある。俗名六三郎なれば。人何ぞあして左
官六（さくわんろく）と呼ぶ。或時友だちが路よて。仕事場へ行くと行逢ひ。左官六さ
ん鉢巻（はちまき）の御普請（ごふしん）かと云ひしが。河東節流行の時代なれば。おの語路
滅法もてはやりたることや今に覺居たり。

其後養家が出で。深川の羽織衆を聚とく。吉原の幫間とあり。荻江露
助と云。後まこと吉原を退いて。一中節の大まとなり。都千中と改む。初
め南國矢之倉に住み。まれより玄弥店（げんやだん）に移りたまはば。玄弥店の御通

と皆こゝを呼ぶ。美音よ、頃淨獨鴉とも器用にうたひ。そよ見識
高くとまりたる男なれば。通常に密は少く。具負よされ方こは。十
人衆。法大名御金所用達。藏前の札差。金銀座の役人衆など。悉くの密
筋にて。今日で云ふ紳士連をのりなす。故に世間よそとよと能大た
敵と云。

又本店とも呼へたるに活あり。弟子に有中といふ者あり。元来更紗
職人にて。名を瀧といふ。法藝に器用なれば。更瀧と名乗り。天狗連に
て寄席へも出たり。中々利口者。後に千中の門に入り。吉原の轉間
となる。此男師匠を氣どまて。權威もさす。中以下に具負の密多し。
さきば有中の師匠の事を常にお店と呼ぶ。いつか密筋も本店の
名を呼び。そ方が通用よくなり。男藝者は吉原が本場なるに。他の轉

間達も。本店とくと能く呼びたり。千中が其時まさまとまきお様を
知るべし。併し馬十の的驢の名。何故を知らざらん。慶應元年の夏。依羽さ
んの御招よて。一中節の門弟共を連れ。上州相生へ往き。其地に山二
といふ才一番の料理屋へ泊り居る中。卒中風よて死したり。

とやの海老も止る

春しし岩えんらわ閣様

馬十連春興扇面白不覺

泰應院英徳信士

安政二乙卯年九月十七日歿行年未詳
菩提所ハ下総田子の由

田子七。馬十連にて水呑官鷓毛トモと云。下総田子の産にて。本ハ船歌な
り。後。後に新吉原の幫間とありて。田子七平と云。其後。因所京町へ
藤屋といふ鰻屋を開業す。平生よもをかこあつて。幫間中の隠一
といをる。船歌よみ御座敷の取柄が出来る位ゆゑ。万事の察し有る
べし。鷓毛の名その由来を不知。

君と舟長持さるる夕涼み

馬十連喜無扇面句ふ覚

櫻永院善孝日幹信士

明治七甲戌年十一月廿日歿行年六十六歳
寺ハ淺草松葉町妙音寺ナレドモ米引内
埋葬不相成時ナレバ谷中三崎町妙法寺に
葬ル七浦善神の在る寺ナリ

櫻川善孝。馬十連より。水呑官波化^{まけ}。深川仲町の産なり。初代櫻川善孝
ハ石川善孝助。その男より。初名由次郎と云。天保御趣意の時勅吉原
へ轉ト。父の名を継ぎ二代目櫻川善孝と云。轉間中は大名物なり。

或年日暮ら方へ送りおせし掛乞ひ言譯けし紙ありを文

まゝやに大由善妙法由より一形上候由存一の世傳坊より志ん
りうま夜より中候はさつりしを子こそ秘由何つりり形上の
いばは跡りの善孝と由覚悟たのみ入の先ままをかけとりと
かゝいぐさうがまの二番目いふさかめをいふし

梅若(はな)はる(はる)吉原

十景判卷

仙の如く

卯山瓶

何物も好むはこれなり

室三升

けしきの花の如く梅の如く

梅の如く

余の如くけしきの花の如く

自ら如く

トあり花の如く何物も好む

馬十連春興扇面句不覺

金照院壽僊素行竺阿彌

文政六癸未年十月二日世を年五十七歳
墓は谷中墓地御隠殿の板の中途西側あり
石面の梵字は高野山快極大僧正の御筆と

馬十連より。水吞官竺仙^{ちくせ}本名橋本仙之助。當今素行と改む。竺仙といふ
身體ちんちくなる故の渾名あり。性資虚弱あまじ。年四十才の時。善
提所へ法名を授ひ。明治十一年五十六才より高野山へ参詣し。大師
御影供三月二十一日薨斃して。千藏院院主法谷賞亮和尚より。金照
院と法號を下され候。

世に名家の名を嗣ぐ人多く阿れど。己れいさる事を好むゆのふい
阿ふ。竺仙の名も古人より梵竺仙阿りて。そ仙翁の如くなれど。然に
は阿らず。まいたくく天へ石を擲らるの道理より。及びもあまじ
あり。さかしの事い善景よも。わきま居たり。世の人必く古人の

名を憚らざる者と憎まらざることなれ。

ア、馬十の連中の残りたあは世の人となり。娑婆よ居るは我等一人。今日の世の中ハアキハのみ多く。馬十の昔なつかりさだ。本ごろ心小覚えたる事共を。廻らぬ業よ書き留め置くなり。あまは残りたる我等なれば。香花にかへん手向あり。さきと草葉の後の人とは。世もアキハよ成つたと云ひもやせんう。あまかゝる。

卯の歌

卯の歌 卯の歌 卯の歌

卯の歌

卯の歌 卯の歌 卯の歌

卯の歌

卯の歌 卯の歌 卯の歌

卯の歌 卯の歌 卯の歌

卯の歌 卯の歌 卯の歌

卯の歌 卯の歌 卯の歌

卯の歌 卯の歌 卯の歌

卯の歌

卯の歌 卯の歌 卯の歌

101
2
144

10
5
144



中

心 下 天 魚 人



梁川



為童送愛

夢仙人在夢

榮時



文安詩歌合の十六番

仙家見菊

左

侍従重輔

一飲菊潭秋浸霞随流忽到世仙家風霜還恐芥

柯爛不為看棋為見花

原作地仙更作世仙

卷議雅永

少人の跡は世の跡に朽一芥の元は色を残も白菊

判云 大政大臣

左右とも一様柯の跡を詠せりとして世の跡の枯
き詞は竹の如く殊なる風情の竹に似たり朽一芥の元は色を
残も白菊とつけられゆへ減らししきと仰りて竹の如く右様を
詠せりと云はれたるや

三仙書行翁の森雲の賀を詠して何事も書かざりともこれ
は心づかひに
西暦廿二年十月吉日 松籟居士源

考卿の三章 遊書の
爲の正しくし 忠誠心
を御 持心 縁より可し
存て 多安 符 取 合 中
と 折 返 して 可し 是

是の 道 人 可 取 可 取 可
於 未 尋 求 心 百 善 の
と 取 可 可 可 可 可 可
お 認 可 可 可 可 可
と 可 可 可 可 可 可

長年おは
 さま
 平賀

横濱先生の祝賀を承らるゝの御文
 には誠に感銘の深き御返事
 にお返しを兼ねてお返事
 させていただきます
 平賀



萬年招き
 五十の和真

加藤氏令孫幼年

心は静か

七十七の年よ

そなたの

はなを

よめ

の



五月

加藤



吳服商世佛子精于業最巧造涼且
 多才自性多福多壽多男子出可及矣
 茲字五福國以祝
 竺佛漆仰十七夜未辰
 庚子五月 友人香走度



石背



著世佛在
 之自性也
 壽久乃
 歡之南

仙遊

仙遊

仙遊

仙遊

仙遊

仙遊

仙遊

仙遊

仙遊

仙遊

仙遊

仙遊

橋本素行の——七十七の賀遊をいひ
 目といふ冊子をいひ——これゆへに句をか
 き——よしとてこの翁や子孫振と考へて
 仕むれとこれよしとて不裁子代り春秋は富む
 程ん

紫香

小——子

年——男

年男



祝

松葉庵大徳壽

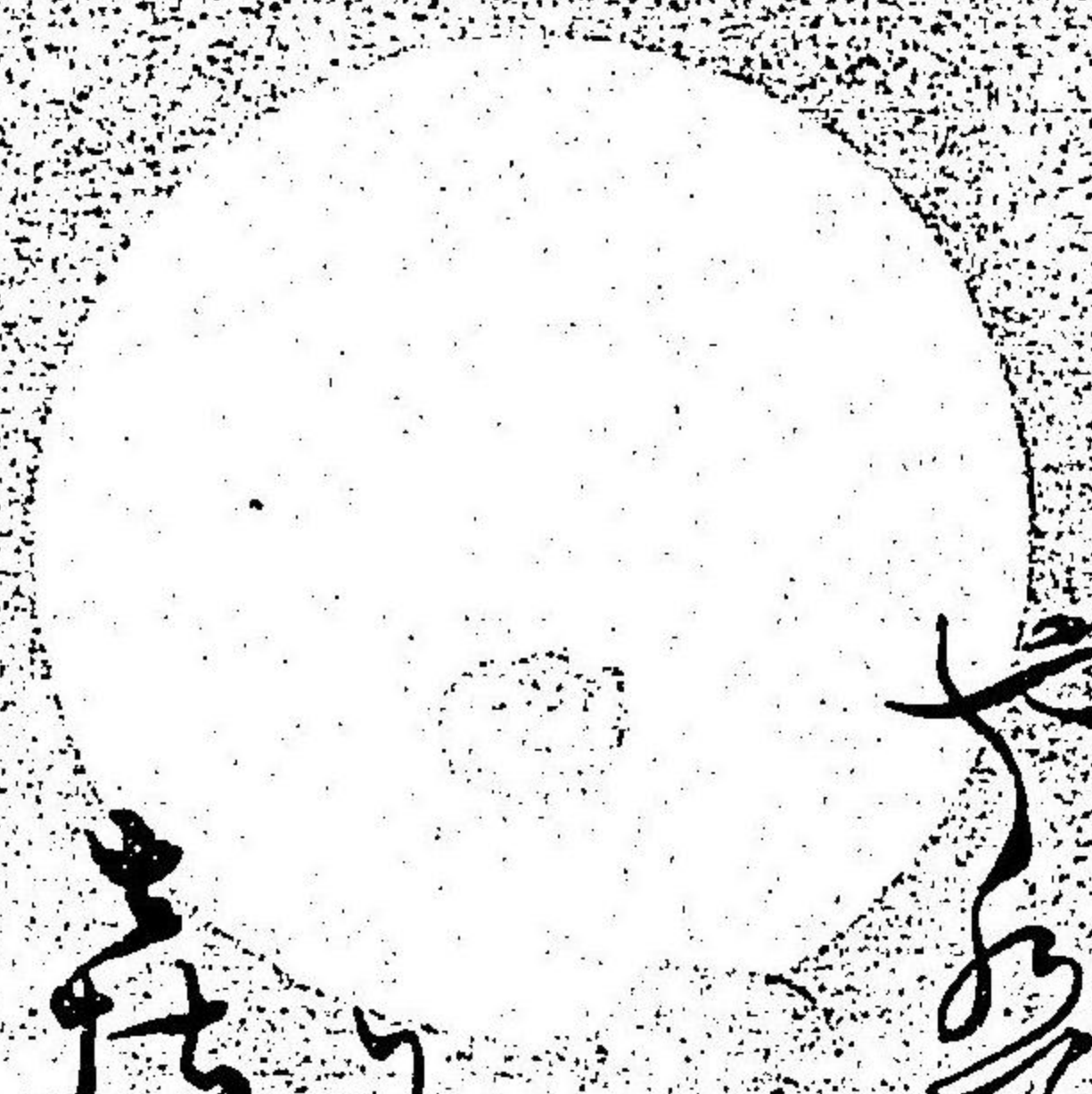
菊の心を松の——も枝の節に

清和

大なる... 路... 小... 路... 昔... 身... 十... 自... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

出... 乃...

圖...



乃... 乃...

乃... 乃...

乃...

乃...

乃...

乃...

乃...



疏
育
固



石
信
魚
固

かきりかき

あゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝ

あゝあゝ

あゝあゝ

羊角骨を煮る

花の咲くころの梅枝とろ梅枝

ゆみさら新のなまめなまめおし

あゝあゝあゝ

菊ああゝあゝあゝあゝ

梅ああゝあゝあゝあゝ

朝ああゝあゝあゝあゝ

かきくわいせいのあまのり
きんぎょのうみかきくわいのり

かき素朴
かききね

かきくわいせいのあまのり

かき素朴

かきくわいせいのあまのり

かき素朴

かきくわいせいのあまのり

かき素朴

かきくわいせいのあまのり

かき素朴

かきくわいせいのあまのり

かき素朴

かきくわいせいのあまのり
かきくわいせいのあまのり
かきくわいせいのあまのり

かき素朴
かき素朴
かき素朴

かきくわいせいのあまのり

かき素朴

かきくわいせいのあまのり

かき素朴

かきくわいせいのあまのり

かき素朴

かきくわいせいのあまのり

かき素朴

孫子と孫を慕はし菊のこ

外山

降つる方こそは物やを

鳥尾 魚沼

具心とてし物や相を神

宮原

是竹のききや如き

三浦

花のたよとてきき

倉石

花のたよとてきき

梅原

花のたよとてきき

しほやしのきき

梅

梅樹

老のなや祝はし

小櫻金

ききよとてきき

大

唯波

下流のくしきき

直島

花のたよとてきき

倉石

花のたよとてきき

武部

小男よとてきき

時龍

人志の書に記す松
松名中の松の松の松

松
松

松の松の松の松
松の松の松の松
松の松の松の松

松
松
松

松の松の松の松

松
松

松の松の松の松
松の松の松の松
松の松の松の松

松
松
松

松の松の松の松
松の松の松の松
松の松の松の松

松
松
松

松の松の松の松
松の松の松の松
松の松の松の松

松
松
松

花の年(花の年)の春(春)の
河(河)の物(物)の破(破)り(り)の音(音)

花(花)の年(年)の春(春)の
秀(秀)光(光)

い(い)の(の)曲(曲)の(の)花(花)の(の)房(房)
浪(浪)の(の)心(心)の(の)身(身)の(の)程(程)の(の)
花(花)の(の)心(心)の(の)身(身)の(の)程(程)の(の)

三(三)井(井)
花(花)の(の)心(心)の(の)身(身)の(の)程(程)の(の)
花(花)の(の)心(心)の(の)身(身)の(の)程(程)の(の)

花(花)の(の)心(心)の(の)身(身)の(の)程(程)の(の)

花(花)の(の)心(心)の(の)身(身)の(の)程(程)の(の)

花(花)の(の)心(心)の(の)身(身)の(の)程(程)の(の)

花(花)の(の)心(心)の(の)身(身)の(の)程(程)の(の)

花(花)の(の)心(心)の(の)身(身)の(の)程(程)の(の)
梅(梅)の(の)心(心)の(の)身(身)の(の)程(程)の(の)
花(花)の(の)心(心)の(の)身(身)の(の)程(程)の(の)
花(花)の(の)心(心)の(の)身(身)の(の)程(程)の(の)
花(花)の(の)心(心)の(の)身(身)の(の)程(程)の(の)

花(花)の(の)心(心)の(の)身(身)の(の)程(程)の(の)
梅(梅)の(の)心(心)の(の)身(身)の(の)程(程)の(の)
花(花)の(の)心(心)の(の)身(身)の(の)程(程)の(の)
花(花)の(の)心(心)の(の)身(身)の(の)程(程)の(の)
花(花)の(の)心(心)の(の)身(身)の(の)程(程)の(の)

けつとらるるも小神菊傳し 桂春
 舞あし可く舞はしき山及葉のふ 吐雪
 七竹のふらふらまほほふ 松煙
 空の青く中可有初音河 恋雅
 土の響き世をふたのこ何れ危 冬車
 月影を空のふに河一小夜原 岳山
 よちこしり物師あうらふ葉の風 金桃
 七竹を折く神を 春人の里 持方

不やまふら一見女菊小神 可麗き
 子也節のふらふら一見花のふ 秋十
 冬も雪の松竹縁の男山 二峯
 所々見す春のふと老の性也 苑好
 新緑の竹のふらふら一見花のふ 桂一

春のふらふら一見花のふ 梅甫
 春のふらふら一見花のふ 可笑

ことばのまじりたるの祝ふは三つとて
 是の其の端の老しは一葉の
 けしきとてまじりたるのまじりたる
 一葉のまじりたるのまじりたる
 誰かあし一葉のまじりたる
 何れかあし一葉のまじりたる
 七件の外おまじりたる
 求古

素行坐禅の句

素行坐禅の句
 大正元年正月元日
 元日

素行坐禅の句
 大正元年正月元日
 元日

素行坐禅の句
 大正元年正月元日
 元日

同治五年甲午十一月廿七日入浴の儀

稲妻のしるしを眺める

おまへに申す甲午の日は光の御宿

御廟を拜して

おまへに申す甲午の日は光の御宿

おまへに申す甲午の日は光の御宿

おまへに申す甲午の日は光の御宿

おまへに申す甲午の日は光の御宿

おまへに申す甲午の日は光の御宿

おまへに申す甲午の日は光の御宿

おまへに申す甲午の日は光の御宿

おまへに申す甲午の日は光の御宿

おまへに申す甲午の日は光の御宿

おまへに申す甲午の日は光の御宿

おまへに申す甲午の日は光の御宿

おまへに申す甲午の日は光の御宿

春の山鳥集まるとは春の餅

平山守 外宮

まわり果てし — 松林

平山守 拜礼

あつちい思ふの気なから

二見はのち浮ぬい若の間いさ

い表せしきわし — 小池

卯月九日雨降ぬい思ふと云ふ

時節はしほり雲海の色あり

春山

あふみのいぢいぢい

春山 外宮

あつちい思ふの気なから

信長公の墓をい

あつちい思ふの気なから

脚所

西平信子花信抄
信子の花中一冊
信子の花中一冊
信子の花中一冊

山岡社

信子の花中一冊
信子の花中一冊
信子の花中一冊

初めは信子の花中一冊

全周書

信子の花中一冊
信子の花中一冊
信子の花中一冊

信子の花中一冊

信子の花中一冊

信子の花中一冊

信子の花中一冊

信子の花中一冊

信子の花中一冊

信子の花中一冊

清心親也者

清心親也者

清心親也者

清心親也者

清心親也者

清心親也者

清心親也者

清心親也者

清心親也者

清心親也者

清心親也者

清心親也者

清心親也者

清心親也者

清心親也者

清心親也者

清心親也者

清心親也者

河津の長

程の長
花の長
花の長

花の長

花の長

花の長

花の長

花の長

花の長

花の長

花の長

花の長

花の長

花の長

花の長

花の長

花の長

花の長

色も三つ揃ふ水のちりちり

初瀬ありし雨

あつちの川 甲斐守源深見神

あつちの川

おぼろの川 一とらふ

春日神社

柳の葉のまじりてさへも昔に

あつちの川

新井の川 影もあつちの川

おぼろの川 柳の葉のまじりてさへも昔に
あつちの川

あつちの川

あつちの川 柳の葉のまじりてさへも昔に
あつちの川

あつちの川

あつちの川 柳の葉のまじりてさへも昔に
あつちの川

あつちの川

あつちの川

昔の事かきとておぼしき事あり
しるすはるの事ありしを
あることとていふを

都の備

昔の事かきとておぼしき事あり

山中の行

昔の事かきとておぼしき事あり

楠の木の葉を記す

昔の事かきとておぼしき事あり

一の谷

日長十六日 雲も雨もなし 晴れ 風もなし

房持とてしるす事あり

花の事かきとておぼしき事あり

昔の事かきとておぼしき事あり
しるすはるの事ありしを
あることとていふを
昔の事かきとておぼしき事あり
しるすはるの事ありしを
あることとていふを

日長十六日 雲も雨もなし 晴れ 風もなし

川のほとりには花の香りがする

夏は暑いから涼しい場所を探そう

程丹浮

程丹浮の鼻の通りがよい

大園を原

大園を原の景色が美しい

大園を原の景色が美しい

大園を原

大園を原の景色が美しい

川中を原

川中を原の景色が美しい

善光寺

善光寺の景色が美しい

善光寺の景色が美しい

善光寺の景色が美しい

善光寺の景色が美しい

厚く保つて置け

上へお返しをせよ

~~~~~

~~~~~

野山大徳正收極大教の巻

~~~~~

~~~~~

~~~~~

石山寺

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~


けはを源の流をいへば

りかゝるの好むかゝる

能くの時流をいへば櫻

看すのて能くの時流

ゆかたを禪のいへば

雲をいへば雲をいへば

そののいへば雲をいへば

才傾をいへば雲をいへば

仙 於 仙 於 仙 於 仙 於 仙

空也音を茶をいへば

律をいへば音をいへば

身もいへば音をいへば

不二講家の音をいへば

いへば音をいへば

角の音をいへば

音をいへば音をいへば

その音をいへば

仙 於 仙 於 仙 於 仙 於 仙

ナウ

宗旦のうきをなぬる才もつり 於

せしむるのし丁峰り 僻 仙

荒津のたきうへにまほく 於

将の並木りきのお脚り 仙

乃却を理しむたかまきし 於

吾の毎かりしきり包 仙

お

とこらびきぬぬの起るの鏡 於

坐仙あゝの歌中せのぬいは昔の傍 留方いぢら
世流をきよめ其舟子た因の起る可の可也
因の志をなす又子孫をたし因をたす
よのみのわが歌をそそぎし我はたはらし
祖父の因をりしよのめを ぬれし心をたす

誰の因をたすはしむる才のたす

芥目

梅亭



おのまゝに知し人々知る積も。一歩もや。恥をさすのふ
今年七十七のよきふかやうに少嬉し。され
一歩もや。おのまゝに知し人々知る積も。一歩もや。恥をさすのふ
玉縁を記す。おのまゝに知し人々知る積も。一歩もや。恥をさすのふ
おのまゝに知し人々知る積も。一歩もや。恥をさすのふ
おのまゝに知し人々知る積も。一歩もや。恥をさすのふ
おのまゝに知し人々知る積も。一歩もや。恥をさすのふ
おのまゝに知し人々知る積も。一歩もや。恥をさすのふ
おのまゝに知し人々知る積も。一歩もや。恥をさすのふ
おのまゝに知し人々知る積も。一歩もや。恥をさすのふ

かまや。おのまゝに知し人々知る積も。一歩もや。恥をさすのふ
玉縁を記す。おのまゝに知し人々知る積も。一歩もや。恥をさすのふ
おのまゝに知し人々知る積も。一歩もや。恥をさすのふ
おのまゝに知し人々知る積も。一歩もや。恥をさすのふ
おのまゝに知し人々知る積も。一歩もや。恥をさすのふ
おのまゝに知し人々知る積も。一歩もや。恥をさすのふ
おのまゝに知し人々知る積も。一歩もや。恥をさすのふ
おのまゝに知し人々知る積も。一歩もや。恥をさすのふ

日乃恩中。老のよきふかやうに少嬉し。

集優孝行竺阿弥



おのまゝに知し人々知る積も。一歩もや。恥をさすのふ
集優孝行竺阿弥

101
2
144

明治三十二年十二月五日印刷
同 三十三年五月廿二日發行



著述者

橋本素行

同區新福富町三拾番地

發行者

橋本仙之助

同區北富坂町拾九番地

印刷者

橋本英次郎

同區須賀町拾九番地

製本所

松崎半造

白雲山日記

十三年夏秋

橋本素行著
橋本仙之助

橋本英次郎
橋本

橋本素行
橋本

101
144

